

---

# マイ・スタイル

上月

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

マイ・スタイル

### 【Nコード】

N1644D

### 【作者名】

上月

### 【あらすじ】

恋がしたい。エゴイステックで、ヒステリックで、サディズムで、マゾヒズムな恋が。

恋がしたい。

愛煙家が見事に集った職場から逃げるように、ビルの屋上のフェンスに凭れかかりながら、わたしはふと思った。

今日は風がきつく、空を見上げると雲の流れが一段と速い。隣のビルのアンテナにとまっていたカラスが、大きな羽を広げて空高く威嚇たつぷりに飛び立つのを見つめながら、わたしは冷えた手をスーツのポケットに突っ込んだ。

そう、恋がしたい。

冷たく、鋭いくらい研磨されたような冬の風に、長い年月をかけて伸ばした髪が靡くのを手で押さえつけて、手首につけていたシンブルなデザインのシュシュで団子状に纏め上げる。いつ頃だっただろうか、願掛けのように髪を伸ばしはじめたのは。もう、夏場なんてスキンヘッドにしたい衝動に駆られるくらい、煩わしく伸びた髪なのに、なぜか切るうという気にはならない。むしろ、もっと長く伸ばしてやろうと、ある種のチャレンジ精神すらわき上がってくるほどだ。けれど、別に髪にそこまで愛着があるわけでもないし、ましてや長髪が好きという恋人と付き合ってるわけでもない。ときたま、どうしてこんなにわたしは髪を大事にしてるのだろうかと問いたくなることもある。

わたしは前髪をかき上げると、空を仰いで目を細めた。

体当たりする北風が、ついさっき露わになった首元をすうすうと通った。

\*\*\*

「佐藤 十です。よろしくお願ひします」

部長の長つたらしい紹介が終わった直後、臆病な子犬のように微

かに震えながら、いつ裏返つてもおかしくないようなトーンの安定しない声でそう言いながら頭を下げたのは、わたしの所属するマーケティング部に配属された新人社員だった。黒い短髪に痩せた長身なかなかの男前だが、ホワイトボードにでかど書かれた名前に不釣合いなくらい、肝が小さいように見える。ぱらぱらと感情のこもってない、お愛想のような拍手に、佐藤という男はぺこぺこ頭を下げながら、今にも胃が九つくらいに分裂しそうなくらい、顔を真っ青にしていた。

前に、部長に次の新人社員の面倒はわたしの担当になる、という予告を思い出して、わたしは拍手する手をとめて深くため息をついた。

\*\*\*

「あの、灰谷先輩」

佐藤が配属されてから一ヶ月。

呑み込みの遅い佐藤は、何かしら配られた企画書やサンプルを持つてはわたしの元へやってくる。

佐藤の机はわたしの隣。書類で溢れかえったわたしの机とは対照的に、元来身の回りは清潔に、というモットーを持って生きてきた根っからのきれい好きみたいに、彼の机はいくら分厚い資料やプリントを渡しても、わたしののような惨状になることはまずなかった。

椅子をくるりと回して佐藤の方に体を向けると、コーヒーをすりながら何、と問う。

「ここ、この部分なんですけど」

佐藤は書類をわたしの目の前につきつけて、黄色の蛍光マーカーでなぞられた文字列を指さす。

わたしは少し仰け反って、佐藤を椅子に座るように促しながら、細々と細部までわかりやすいように説明する。

うんうんと頷きながら、素直にわたしの言葉にいちいち返事をす

る佐藤の姿はなかなか健気で可愛らしい。だが、彼の容量の悪さを即座に思い出し、実はわたしの言ってることの半分もわかってないのだなと思うと、急にどっと疲れが出てきた。

仕事熱心なのはいいことなのだが、少し問題がある。

「じゃあ、大橋さんおおはしのところに行けばいいんですね」

ああ、と納得したように佐藤は言っていると、勢いよく立ち上がるが、そのまますぐに萎んで、大橋さんって、どこの部でしたっけ、と苦笑いしながら訊いてくる。

慌しく動き回る、ごった返したような職場にいる社員を尻目に、この男はいつまでも染められず、のほほんと一生懸命に仕事をしていることに、感心していいのが、呆れていいのかわからなくなる。

わたしは渋々むくんだ脚を奮い立たせて立ち上がると、佐藤を大橋の元まで案内する。

マーケティング部の部屋を出た瞬間、佐藤はヘビースモーカーが多たって、いやですよねえ、と声を潜めて言ってきた。

いくらマーケティング部を出たからとはいえ、狭い通路でいつもの調子で話していれば、いやでも他人の耳に話が筒抜けになってしまうことを心得ていた佐藤の、ほんの少しの警戒心なのだろう。けれども、あまりにも佐藤の声が小さすぎて、わたしは少々首を伸ばして佐藤の方に耳を近づけなければならなかった。

わたしはそこまで煙草を嫌ってはいないが、まだまだ新しく、清潔感の漂う洒落たデザインの白い壁が、煙草の煙によって日に日に黄ばんでいくのを見るのはあまり好ましくなく、わたしは曖昧に頷いた。

「それより、先輩の髪って、いつ頃から伸ばしてるんですか」

何の脈絡もなく、唐突な質問にわたしは一瞬眉を寄せる。

「さあ」

思いつく節もなく、わたしは適当に答えた。

「髪、染めたりしないんですか」

「わたし、そういうの嫌いだから」

「どうしてです？」

「白人系の外国人から見たら、日系の人の髪染めほど笑えるものはないんだって。わたしも日系の人は黒髪の方が似合うと思うし」

「結構ミィハーなんですね」

「そうでもないわよ。ちゃんとアイデンティティぐらい持つてるんだから」

「でも、俺、先輩の長い髪すごく好きですよ」

「へえ」

突然の予想していなかった言葉に、わたしはらしくなく少し鼓動が速くなった。少しだけ佐藤を気に掛けていただけに、ダメージは大きい。

それを悟られたくなくて、わたしはさも無関心そうに、適当に流す。

「あ、今スルーしましたね」

「あら、そう？ ごめん。そんなつもりじゃなかったんだけど」

「長い髪って、そそられませんか？ 特に、先輩の黒い長髪って、結構俺のツボに入るんですよえ」

佐藤は、意外によくしゃべる。それもべらべらと。意識的なのか、それとも無意識なのか。それでも、わたしが佐藤の言葉にいちいちときめくには充分の話しっぷりだった。

\*\*\*

仕事もようやく一息つける時期に差し掛かった頃、職場内の女性にはみんな佐藤狙いでアタックをしていた。

メタボリック症候群ではないかと、目を疑うほどの太りっぷりの男性職員が多い中、佐藤という好青年タイプの男性職員は、愛と恋愛に飢えた女性職員には恰好的となっていたのだ。

佐藤は毎度毎度、わたしと二人で飲みに行くときに、そのことについてよく愚痴をこぼした。そんな彼に、多少なりとも嫉妬を抱い

ていたわたしは、まんざらでもないんじゃない、と軽くあしらった。そのたびにそんなことないですよ、と非難の声を上げる佐藤は、やはり可愛い後輩であると同時に、確かに恋愛感情を抱いているということもわかった。

「やっぱり先輩って、年上好きですか」

飲みながら、半ば酔っ払ったような口調で佐藤はわたしにそう訊いてきた。

見ればもうグラスに入っている酒は底をついている。

「別に。好きになれば誰でも」

「じゃあ、俺って恋愛対象に入りますかねえ」

確実に酔っている。

洒落たバーに見合った、少しイケメンの店員が、苦笑しながら酒をくれとせがむ佐藤に、ワインを注いだ。

店内を見回すと、もう大分遅い時間のせいか、客は点々と、お互い暗黙の了解で距離を置くようにはなれた場所に座っていた。

薄暗い、ブルーライトの照明が心地よくて、ほろ酔い気分のまま佐藤が眠ってしまうんじゃないかと心配になる。

「あんたはどうなのよ」

「俺ですかあ？俺は好きですよ、先輩の髪」

「いや、髪で好き嫌い判断しないでよ」

「そりゃあ先輩のサバサバした性格とかは、今までにない感じで好きですけど、やっぱり決め手は髪ですよ」

「それって、あんま嬉しくないわね」

わたしはぼつりと呟いてから、帰るわよ、と佐藤の鼻を軽くつまんだ。

「今日あんたが払ってね」

「ええ！いつも先輩が出てくれるじゃないですか！」

急に目が覚めたように起き上がる佐藤を見て、わたしは呆れたようにため息をつく。

「いいから払いなさい。たまには先輩に楽しませなさい」  
そう言つと、佐藤はぶつぶつと文句を言いながらも、ポケットから財布を取り出した。

\*\*\*

次の日の休日、わたしは朝起きてすぐに美容院へ向かった。

雑誌を読んで髪型を研究するわけでもなく、若くて可愛い美容師に、「短く切つて」とあっさり告げて、ほんとにいいんですかあ、と訊いてくる美容師にいいのいいの、と乱暴に言い捨てた。

ジヨキジヨキ、とハサミが髪を切り落としていく。ぱらぱらと落ちていくわたしの髪は、昨日の決意を更にかためてくれるようだった。

どうせ好きになるなら、恋がしたい。愛はしたくないのだ。ただ無償で与え続けるだけの好きなんて、馬鹿らしくてやっていられない。身勝手で、傷つけた傷つけられたとヒステリックになつては、大人だけが所有できるエゴイステックで、ひどくぼろぼろになるような恋がしたい。それにはリードは必要ない。どうせなら、対等に勝負して、負けてもいいから燃焼するのだ。

髪を切り終えて、大きな鏡に映つたわたしの髪は、肩にもつかないくらい短くて、わたしのちよつと勝気な顔にはお似合いだった。

月曜に会つたときの佐藤の反応が手に取るように予想できて、わたしはあまりのおかしさに思わずぶつと小さく笑つた。

……了

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1644d/>

---

マイ・スタイル

2008年11月7日07時04分発行